

<シンポジウム>化粧品と皮膚の問題点

化粧品皮膚障害の診断法をめぐって

—製品パッチテストの意義—

早 川 律 子*

Diagnostics of Cosmetic Dermatitis

—Evaluation of Cosmetic Patch Test—

Rituko HAYAKAWA*

我々が日常外来で接する湿疹、皮膚炎患者の多くは、日常生活用品による刺激が一因となっていると考えられ、刺激物質の発見と、除去とにより、治療効果が上がり、疾病の再発を予防することが出来る。従来女子顔面再発性皮膚炎と診断されていたものの殆んどは、患者の日常生活用品の十分な検査を施行すれば、化粧品等による接触皮膚炎であったことが判明する。

1. パッチテスト施行と臨床経過

昭和50年の名古屋大学医学部附属病院分院皮膚科外来患者におけるパッチテスト施行者の臨床経過を見ると、パッチテストが、治療の助けとなったと考えられるのは、化粧品皮膚炎、女子顔面再発性皮膚炎、女子顔面黒皮症であり、脂漏性湿疹、日光皮膚炎、酒皰等ではあまり価値が認められない。

色素沈着を伴う疾患における製品パッチテスト

昭和49年に名古屋大学医学部附属病院分院皮膚科外来でパッチテストを施行した女子顔面黒皮症33例、化粧品皮膚炎28例のパッチテストの結果を比較すると、女子顔面黒皮症患者は1例平均6.33個のファンデーションを使用し、そのうち28.8%に陽性を認めた。一方化粧品皮膚炎患者は1例平均3.75個のファンデーションを使用し、そのうち15.2%に陽性を認め、ファンデーションの使用数と、陽性数にかなりの差を認めた。

2. パッチテストと皮膚症状の相関性

昭和50年1月～6月におけるパッチテスト施行者175例中パッチテスト陰性であって、実際使用した場合に刺激症状が認められた例が14例(8%)あった。またパッチテスト陽性と判定した例のうち18例が、何らかの理由で、その製品を使用し、刺激がなかった例7例、刺激を認めた例11例(61%)であった。

3. パッチテストにおける問題点

テスト絆、絆創膏の種類によっては、同じ製品を同じ部位にテストしても結果が異なる場合がある。oil クリーム類は比較的差が少ないが、化粧水、石鹼液等は差が大きい。

複数使用時におけるパッチテスト

製品は単品で使用される場合はまれで、殆んどが複数で使用される。皮膚表面で複数の製品が混じり合い変化を起こす場合、はじめに使用した製品の性質で次に使用する製品に対して皮膚の被刺激性が変化する場合、数種の製品を塗布する場合に加えられる機械的刺激の影響等を考えねばならない。